様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２４１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０１５３２

研究課題名（和文）L.ロビンズの選択理論とアノマリーを巡る20世紀初頭の経済学の再考

研究課題名（英文）Reconsideration Early 20th Century Economics on L. Robbins' Choice Theory and Anomalies

研究代表者
田中　啓太（TANAKA, Keita）

尚美学園大学・総合政策学部・准教授（移行）

研究者番号：５０６４８０９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：合理的な選択行為に基づいて経済学の方法論的基礎を構築したと考えられている従来のロビンズ像に対して、ロビンズの経済主体の想定は、厳格な合理性だけではなく、H.サイモンが着目するような非合理的な行為・アノマリーに及ぶことを明らかにした。このような方法論的射程はロビンズ独自のものではない。こうした立場はW.S.ジェヴォンズに始まるイギリスの近代経済学の系譜にも見られること、またV.パレートの社会学の領域における非論理的行為との類似性も踏まえながら、本研究は行動の非合理性を巡る諸観点が20世紀初頭の経済学に見られたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ロビンズは人間行動の合理性と非合理性を巡る観点を経済学方法論として明示していた。このことは、主流派経済学の方法論的基礎としての一面的なロビンズ像を修正し、その後の行動経済学につながる経済学者として位置付けることができる。また、20世紀初頭までのイギリス経済学にも同様に行動の非合理性についての観点が存在する。本研究によって、限界革命以降の近代経済学の発展には合理的経済人モデルを超えるより広い合理性の枠組みが存在しており、実証科学としての経済学の歴史整理に埋没している経済観の重層性に改めて着目しながら近代経済学史を捉えなおす必要について示唆することができる。

研究成果の概要（英文）：In contrast to the conventional image of Robbins, who is thought to have built the methodological foundations of economics on the basis of rational acts of choice, Robbins' assumption of the economic agent is not only strictly rational, but also extends to irrational behavior and anomalies, such as those focused on by H. Simon. This methodological range is not unique to Robbins. Taking into account that such a position can be found in the genealogy of modern British economics beginning with W.S. Jevons, as well as the similarity with V. Pareto's illogical acts in the field of sociology, this study reveals that various perspectives on the irrationality of action were found in economics in the early 20th century.

研究分野：経済学史

キーワード：経済学史　経済学方法論　経済人の仮定　L.ロビンズ　P. H. ウィックスティード

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

20 世紀の経済学は、倫理的な価値判断を切り離すことで実証科学としての側面を獲得する ことを目指す歴史を辿ってきた。その発端となる 19 世紀の限界革命以降、微分法の導入により、経済学は物理学のような近代科学の一分野としての地位を獲得した。こうした状況の中、 倫理学と経済学との区別を主張した L.ロビンズ（Lionel Robbins, 1898-1984） の方法論は、モラルフィロソフィーを排除していく 20 世紀の主流派経済学の潮流の発端として理解されている。こうした主流派経済学における選択理論は、現代に至るまでに、A. センの「合理的な愚か者」や、H.サイモンの限定合理性の指摘にあるように、合理的な経済人の仮定に基づく合理的行動の定義について批判の対象ともなってきた。他方で、経済学は倫理や制度と関わる点が重視されるようになり、モラルサイエンスとしての経済学の見直しも進んできている。行動経済学においては、経済人のような最適な行動からの乖離（アノマリー）の概念を分析の軸に置き、合理性の枠を拡大して捉える動きもみられる。 このように、合理的な経済人の行動を取り扱う選択理論としての経済学が批判されてきた中で、ロビンズの方法論は、モラルサイエンスとしての経済学ではなく、自然科学的な精密性を持ち価値判断に中立的な純粋経済学の潮流の発端として位置づけられてきた。

２．研究の目的

本研究の目的はロビンズの選択理論としての経済学の方法論的な見直し行うこと、ロビンズ研究によって 19 世紀末から現代に至る近代経済学史に新しい展望を加えることであった。本研究は、複雑な心理に基づき多様に行動するものとして人間行動を捉えるロビンズの観点を明らかにするが、こうした観点は、A. マーシャル(1842-1924)や V. パレー ト(1848-1923)にも見られる。彼らの経済学の射程は、本来の人間行動の複雑さにまで及ぶが、経済人の枠組みによって理論化される側面のみで理解・評価される傾向にある。これに対して、選択理論の根底に流れる人間理解を方法論的に表面化させ、近代経済学に埋もれた経済観の重層性を明確化することで、近代経済学の歴史を捉えなおすことを試みた。

３．研究の方法

20 世紀初頭の近代経済学の系譜にみられる関連文献を踏まえながら、特にロビンズについては同時代人との書簡や非公開文書を含む一次草稿資料に基づいてこれまでの研究との比較対象を試みた。ただし、研究期間における新型コロナウィルス感染拡大の影響のため、イギリス LSE への渡航調査は未完了となった。

４．研究成果

＊ロビンズの主著『経済学の本質と意義』において合理的経済人の仮定が限定的・例外的な仮定であり、「目的のある：purposive」であることを経済主体の素朴な合理性として定めてる観点が彼の稀少性定義の根幹であることを指摘した。

・田中啓太（2018）「L．ロビンズの経済学における行動モデルの検討―合理的な経済人と稀少性定義の距離―」

＊また限界革命を担った W. S. ジェヴォンズから始まり、 A. マーシャル、ウィックスティード、ロビンズへ至る選択理論としてのイギリス経済学史の流れについて、近代の選択の合理性の枠組みを超える観点が存在したことを指摘した。これによってロビンズの選択行為の類型を、合理的経済人の形式で示される完全な合理性だけではなく目的選択おいて矛盾を含むような限定的な合理性をも考慮する形で、より多様な人間行動を経済学の研究対象に定めようとするものとして位置付けることができた。この意味でロビンズの経済学方法論の射程の広さが、それまでの選択理論としての経済学の系譜にも見られることを指摘した。

・田中啓太（2019）「近代的パラダイムと選択の合理性―ジェヴォンズ、マーシャル、ウィックスティード、ロビンズ―」

＊ロビンズの経済学の稀少性定義として知られる個人行動のモデルを 2 種類の仮定から導いていることを明らかにした。本研究ではロビンズの用いる仮定を、ロビンズの稀少性定義が含意する主要な仮定と、経済分析において第一次近似としての人間行動を分析する副次的な仮定とに

区別した。この整理によってロビンズの方法論的な射程が、完全合理性を前提とする純粋経済学としての側面だけでなく、近代の行動経済学にみられる非合理的な行動の枠組みを含むものであることを明らかにした。

・田中啓太（2020）「L．ロビンズの経済学方法論にみる二種の仮定」

ロビンズの広い合理性の枠組みは、限定合理性に着目したH.サイモンの行動モデルやV.パレートの社会学における非論理的行為の類型に近いものであることを明らかにし、近代の行動経済学の領域に対してロビンズの方法論が接続しうること指摘した。その上で、こうしたロビンズの方法論的射程が実証科学の枠組みを超えてモラルサイエンスの領域へ至る可能性を示唆し、20 世紀初頭の経済学史の新たな展望を指摘した。

・田中啓太（2021）「20 世紀初頭の経済学の選択理論と限定合理性をめぐって」

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 田中啓太	４．巻 32
２．論文標題 20世紀初頭の経済学の選択理論と限定合理性をめぐって	５．発行年 2021年
３．雑誌名 尚美学園大学総合政策論集	６．最初と最後の頁 13 - 27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中啓太	４．巻 67
２．論文標題 L．ロビンズの経済学方法論にみる二種の仮定	５．発行年 2020年
３．雑誌名 経済科学	６．最初と最後の頁 115 - 129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/ecos.67.3.115	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中啓太	４．巻 27
２．論文標題 L.ロビンズの経済学における行動モデルの検討 ： 合理的な経済人と稀少性定義の距離	５．発行年 2018年
３．雑誌名 尚美学園大学総合政策論集	６．最初と最後の頁 75 - 93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 西本和見・田中啓太
２．発表標題 19世紀末から20世紀初頭における機会費用論――アメリカとLSEでの受容と展開
３．学会等名 経済学史学会関西部会第181回例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中啓太
２．発表標題 競合的パラダイム論からみる L．ロビンズの合理性と非合理性
３．学会等名 経済学史学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中啓太
２．発表標題 モキアの知識経済論にみる知識の選択と主体の合理性
３．学会等名 第23回進化経済学会名古屋大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keita Tanaka
２．発表標題 Rationality and Irrationality in Lionel Robbins’s Essay： His Economics and human behaviour
３．学会等名 YSS2018（JSHET）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 長尾伸一、梅澤直樹、平野嘉孝、松嶋敦茂、塩沢由典、福田名津子、岡田元浩、川名雄一郎、御崎加代子、田中啓太、齋藤隆子、西本和見、吉川英治、表弘一郎、	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 352
３．書名 現代経済学史の射程	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関